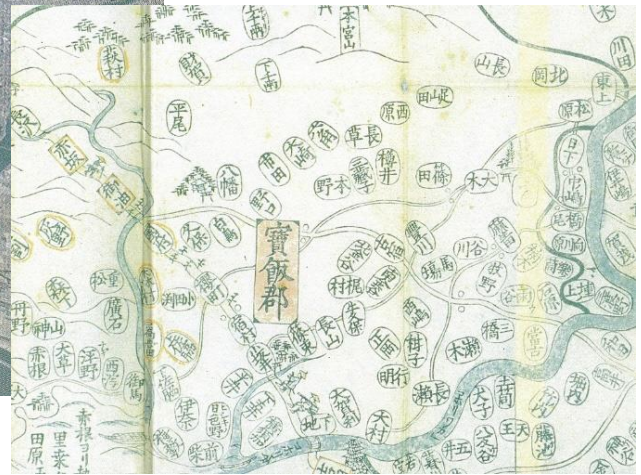


とよかわの地名から防災を考える

一地名に隠された災害情報一



■豊川市域の航空写真と江戸時代の村々

- 1 地名から防災を考える・・・・・・・・・・・・・・・・・・P1
 - (1) 地名から防災・減災を考える動き
 - (2) 地名に隠された災害情報
 - 2 とよかわの地名の成り立ち・・・・・・・・・・・・・・・・・・P2
 - (1) 郡・郷の名前の由来
 - (2) 江戸時代の市域の村名と地名の由来
 - 3 地形と遺跡立地、集落立地、古地図等を読み解く・・・・・・・・・・P5
 - (1) 地形図の読み取り方
 - (2) 遺跡立地の傾向と集落立地
 - (3) 名所図絵や古地図を読み解く
 - 4 自然災害に気をつけたい地名・・・・・・・・・・・・・・・・・・P11
 - (1) 洪水
 - (2) 土砂災害
 - (3) 地震・液状化現象
 - (4) 高潮・津波
- <参考資料> ○参考文献 ○豊川市域の旧村名の由来一覧 ○小字図一覧

令和4年3月

豊川市防災センター

1 地名から防災を考える

(1) 地名から防災・減災を考える動き

日本は、地震や津波、火山災害が発生する頻度が他国に比べても比較的高く、この地域では南海トラフ地震がいつ起きてもおかしくないとも言われています。また近年地球温暖化や気候変動等の影響により集中豪雨や大型台風の来襲などによる風水害のリスクも高まっており、こうした各種災害に対する日頃の備えが欠かせません。こうした中、防災を他人事



図1 土筒の水屋（市史より）

とせず、我が事として「自らの命、家族の命を守る」ための備えをする際に、まずは自分が住んでいる土地の成り立ちや過去の災害を知ることが大切です。

私たちの祖先は、みずからが住む地域でどのような災害が起こるのかを経験的に知っていました。伝統的な地域社会において、災害や生活にかかわる経験知は、信仰や年中行事、伝説、記念碑、文書などのかたちをとりながら世代を超えて継承され、それら「民俗知」が防災・減災に役立ってきたとされます（文化庁編 2017）。

市内の土筒や当古といったかつての霞地区における出水時の水屋（図1）や母屋2階への高所避難などもその一例と言えるでしょう。

戦後の高度経済成長を経て急速に進行した日本各地の都市化は、農村、漁村、山間部の地域社会を解体へ導きつつある中で、地域社会に受け継がれた「民俗知」の継承を脅かし、また都市化の進行は、「民俗知」の刻印ともいえるべき「地名」をも塗り替えつつあります。地名とは本来、災害危険性なども含めた土地の特性をよく表し、災害に対する警告にとどまらず「人間が大自然の中での存在であることを忘れないようにとの警告」を与える役割をもっていたとされ（谷川編 2013）、住んでいる土地の成り立ちや過去の災害を知るため地名に目を向けることは防災・減災を考える上でも大切であり、東日本大震災を契機として津波関連地名・記念碑等の調査も全国的に進んでいます。

(2) 地名に隠された災害情報

名古屋大学の福和伸夫教授は、東京、名古屋、大阪の三大都市圏の駅名や地名と地盤の関係进行を考察する中で図2の「良好地盤地名と軟弱地盤地名の分類」を抽出しました。そして、これら都市では災害危険度の高い軟弱な低平地にまちを広げ建物を密集化・高層化したため大災害には脆いと警鐘を鳴らし、周辺の地名を思い浮かべて建物の耐震化などの備えを行っていく必要があると訴えています（福和 2010）。また中根洋治氏は、愛知県下の災害地名を考察する中で、豊川市域の災害に関連した地名として、「足（悪し）

由来	小分類	良好					軟弱				
地形	山地	山	尾根	岳	嶺	嶺					
	台地	岡	丘	台	坂上						
	傾斜地	傾	斜	地							
	みさき										
	海岸・海						浜	洲	州	湯	
	水辺						島	岸	淵	入	浦
	入江										
地物	窪地・谷地・低湿地						谷	窪	袋	瀬	坂下
	河川						川	河	江	瀬	沢
	湖沼										
人工物	堤						橋	船	津	港	井
	地質	岩	磐				砂	泥	礫	田	
植物	森林	森	林								
	水辺の植物	菰	蓮	竹	蒲	荻	芦	葎	葎	葎	葎
	農作物										
生物	水鳥						鷺	鴉	鷺	鷺	鷺
	水生生物										
	山の生物										
当て字	そね										
	や(谷)										矢
	くぼ(窪)										久保
	くて(淋)										久手
	うめ(埋)										梅
	す(洲・州)										須
	すか(洲処・州処)										須賀
	ふち(淵)										淵
	いり(入)										秋
	つ(漬)ゆ										露
状態・現象・動作	高低										下
	潮汐										潮
水											渡
											深

図2 良好地盤と軟弱地盤地名の分類

山田」、「牛（憂し）久保」、「瀬木（流れをせき止め）」などを取り上げ紹介しています（中根 2012・谷川編 2013）。

現在の町名等には、区画整理や住宅開発に伴い新たに命名されたものもあるため、地名の考察にはなるべく古い時代の名称（大字名・小字名等）を確認する必要があります。参考資料として、旧豊川市域では『新編豊川市史』第7巻に戦前の小字図が掲載されている他、旧御津町については『御津町史』資料編下巻にやはり小字図が掲載され、旧音羽町については『音羽町誌』に伝承も含む小字地名の解説が掲載され、旧小坂井町については『小坂井町誌』に地名考として小字図が掲載されています（巻末小字図参照）。また現在の町名や小字名については、インターネットの地図情報で地図と航空写真を比較して町名や小字名を確認すれば、どのような地形・土地利用の場所にどんな地名があるかも簡単に確認できます。

皆さんも、この冊子を参考としながら、自分の住んでいる場所や地域の地名の由来や土地の成り立ちを一度調べてみてください。併せて、国土地理院のホームページで「地理院地図」を開き、自宅が地形区分で凹地・浅い谷や旧河道にあたらないか等を確認してみてください。そして市ホームページ等で豊川市洪水ハザードマップを開き洪水の際の浸水深を確認するとともに、豊川市防災マップを開いて自宅周辺が土砂災害の危険区域に入っていないかや、地震の震度分布や液状化危険度、津波浸水深などをチェックし、自宅や通勤・通学経路の災害リスクを、自分だけでなく、是非、家族の皆さんと一緒に確かめてみてください。

2 とよかわの地名の成り立ち

（1）郡・郷の名前の由来

豊川市は、平成の大合併により古代から現代まで続いた宝飯（宝飫）郡の主要部を占めることとなりましたが（豊川左岸の旧八名郡域も一部含む）、残念ながら行政区の名称としての「宝飯」は平成 22 年 2 月の小坂井町との合併によって姿を消すこととなりました。

現在の愛知県三河地域は、7 世紀後半に豊川流域の穂国（ほのくに）と矢作川流域の三川国（みかわのくに）が統合され三河国となりましたが、「ほ」の名称は穂評（ほのこおり）として受け継がれ、8 世紀となり令制三河国が成立するに及んで穂評は宝飫郡（ほおぐん）となり、後に「飫」が「飯」と誤記され宝飯郡（ほいぐん）になったと考えられています。

平安時代中期に成立した『和名類聚抄（和名抄）』によれば、宝飯郡には形原・赤孫・美養・御津・宮道・望理・賀茂・度津・篠束・宮島・豊川・雀部・駅家（度津周辺か）の 13 郷が記されており、このうち形原・赤孫・美養は現蒲郡市域に該当し、それ以外の 10 郷が現豊川市域にあったと考えられています（図 3）。また浜松市の伊場遺跡出土木簡から、奈良時代には宮地駅（宮道周辺か）が置かれていたことも知られます。よって、豊川市の名称は近代の豊川町、近世の豊川村、古代の豊川郷にまで遡ることができ、「とよかわ」の地名の由来は、かつて豊川（飽海川とも呼ばれた）の流れが篠束・牛久



図 3 古代宝飯郡郷名比定（小坂井町史より）

保・豊川の近くを通っており、この流れをかかえていたところから、「豊かな川」・「ほの川」として「豊川」とよんだのではないかと考えられています。

(2) 江戸時代の市域の村名と地名の由来

江戸時代の「三州八郡地理之図」(図4)に描かれているように、江戸時代には旧豊川市域に47ヶ村、旧宝飯郡一宮町域に17ヶ村、同音羽町域に3ヶ村、同御津町域に12ヶ村、同小坂井町域に5ヶ村の計84ヶ村に及ぶ村々があったことが知られます(時期や数え方により数に若干の違いがあります)。

これら村名の由来については、江戸時代に刊行された『三河国名所図

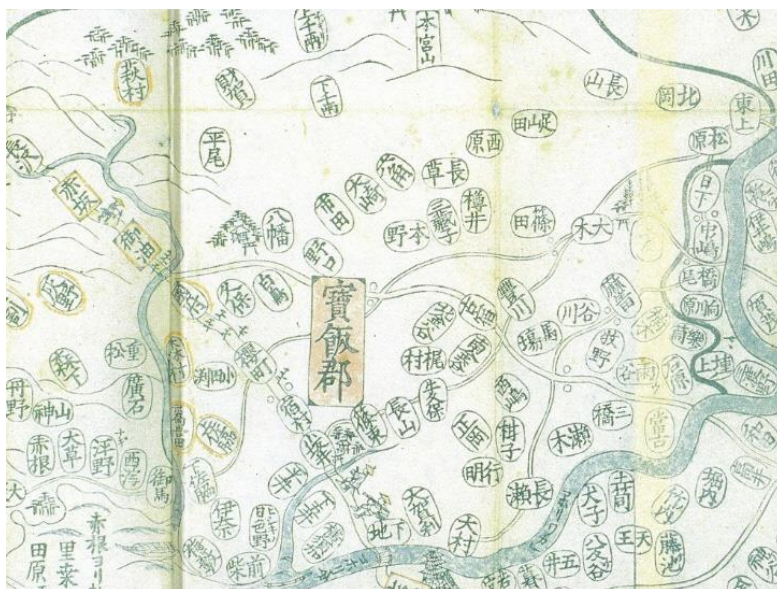


図4 江戸時代の絵図に描かれた市域の村々（豊川の絵図より）

絵』や明治時代に刊行された『三河国宝飯郡誌』をはじめ戦前から戦後にかけてまとめられた地元の各地誌に地名考証の記述がみられるものがあり、豊川市郷土史研究会による「豊川市内の旧町村名の起源考」『豊川史話』第9号や、各市史・町誌（史）、それらをまとめた地名辞典等を参考とすれば、諸説ありながらも巻末の「豊川市域の旧村名の由来一覧」のようにまとめることができます。

ちなみに、巻末の一覧の説明文に下線が引いてあるのは、地名の由来に地形・土地利用や災害に関連した事項が含まれるものであり、豊川市域の地名（村名・町名・大字名）の由来を紐解くと、故事にちなんだ由来以外にも、地形や豊川等の河川との関連で名付けられたと想定される地名が想像以上に多くあることがわかります。

このうち良好地盤地名としては「山」「岡」「森」などを含む地名が挙げられます。市内では、(上)長山村、(下)長山村、足山田村、北岡新田が段丘上や扇状地を中心に占地し比較的良好な地盤上にあると言えますが、帯川上流域の足山田村は「足」が「悪し地形」に通じるものとして災害地名の可能性が指摘され、また正岡村は低地の自然堤防上に営まれた集落で「岡」といっても地盤は必ずしも良好とは言えず、森下村は「森」の次に軟弱地盤地名の「下」が付くのでやはり安全とは言い切れません。



次に地形・地物・動植物などに由来し軟弱地盤が想定される地名としては「井」「鶉」「江」「川」「河原」「窪」「久保」「崎」「沢」「島」「瀬



図5 水田に囲まれた正岡の集落



図6 湧水を利用した平井の共同の洗い場



図7 崖地形を有する牛久保（岸下付近）

「田」「橋」「萩」「渕」「谷」などが挙げられます。「井」のつく樽井村、井之島村、小坂井村、平井村はいずれも地名と井戸（泉）との関連が想起され、小坂井や平井は、小坂井台地の下を流れる伏流水が湧き出る泉が段丘沿いにかつて多く見られたことから付いた名前と考えられています（図6）。「鵜」は鵜飼島村、「江」は江村（江尻村⇒江村⇒江島村）、「川」「河原」には豊川村、向河原村があり、いずれも豊川との関連が伺えます。また「窪」「久保」には牛久保村・久保村があり、ともに段丘の上段・下段のエリアを含む地名であり、崖の崩落や低地部の軟弱地盤に注意する必要があります（図7）。次の「崎」は大崎村、前崎（白鳥村の旧名）があり、舌状台地や扇状地末端の地形を表したものと考えられ、崖上であれば災害リスクは低いものの、崖近くや崖下では注意が必要です。

次の「沢」には長沢村があり山間の沢に因む名と考えられ、「島」には西島村、鵜飼島村、中島村、井之島村があり、いずれも乱流していた豊川の中洲状の地形との関連が伺えます。また「瀬」には瀬木村があり、川の瀬や堰に因む名と考えられ、中根洋治氏は「流れをせき止めた所」として災害地名としています。そして「田」には市田村、小田渕村、麻生田村、足山田村、篠田村があり、村内の水田地帯については軟弱地盤として注意が必要で、「橋」のつく三橋村、橋尾村も豊川の氾濫原に位置し相対的に地盤が悪く、「渕」の付く小田渕村も音羽川の旧流路が付近を流れていたとされ、こうした低地や水田地帯では集落は自然堤防等の微高地に営まれましたが、新たな住宅開発により水田等を埋め立て宅地とした個所では洪水や液状化にも注意が必要です。また萩村の「萩」は「土地が剥がれやすい」意味の崩壊地名の可能性もあるほか、「谷」地名には谷川村、雨谷村があり、ともに豊川の旧流路沿いの地名で、過去に水害にも見舞われた地域でもあり注意が必要です。

これら軟弱地盤地名のほか、川の名称として「佐奈川」の「サナ」は「七輪の火をのせる格子形の棚のことで水漏れ川を意味する」であるとか、山間の村である「千両（ちぎり）」は「ち切る」に通じ崩壊地名の一つであるとか、地名には防災・減災に生かせる各種情報が隠されている可能性があります。



図8 佐奈川上流部の水無し川の様子（荒子橋）